「まち」の再活性化を学ぶ
―飛騨古川、高山、富山における2016（平成28）年度「地理学特講」の覚え書き―

香川　貴志
（京都教育大学）

Learning About some Revitalization Projects in the Central Area of the City:
A Memorandum of Field Trip in Hida-Furukawa, Takayama and Toyama

Takashi KAGAWA

2016年11月30日受理

抄録：授業運営がすっかり軌道に乗った感がある「地理学特講」だが、今年度（2016年度）から受講登録方法が変更され、従来の予備登録方式から教務システム上での受講登録へと移行した。しかし、事前学習に始まる授業運営の内容は、今年も従来の経験をフル活用しつつグレードアップを工夫しながら実施した。当初は「厳し過ぎる」と批判されもした事前学習における文献研究は、多くの受講生から事後に高く評価されるまでに成長した。今年度は、飛騨市（飛騨古川）と高山市で歴史的資産を活かした「まち」（中心市街地）の再活性化を学び、富山市で今日的なコンパクトシティを目指す「まち」の再活性化について実体験した。そのあらましを準備段階から成績評価までのすべてにわたって記述する。

キーワード：まちなみ保全、歴史的景観、中心市街地活性化法、コンパクトシティ、飛騨市、高山市、富山市

Ⅰ．はじめに―訪問地の決定から受講登録、受講者決定まで―

現地実習を軸とした昨年度の前期集中科目「地理学研究」（奇数年開講）は、例年に比べて受講生が14名と少なかったが、最終日に台風の直撃を受けて一部の行程変更を余儀なくされたものの相応の成果を得ることができた（香川：2016a，2016b）。今年度は偶数年であるため「地理学特講」を開講した。まずは受講生数の回復を狙って、昨年度よりも近い場所で実施することを2015年10月上旬に決めた。続いて新潟県上越市で開催された2015年日本都市学会の帰途を活用して、今回の訪問先の富山市、飛騨市、高山市を2015年11月1～2日に順次訪ねる第1回予備調査を実施した。

年末年始のシラバス作成は、第1回予備調査の結果を踏まえてフレームが決まった状態で執筆した。その後、2016年2月14～16日に、2016年度「地理学特講」の予定コースを巡る、大学院後期開講科目「社会科教育教科内容論Ⅳ―地理分野―」を実施した。それは言うまでもなく「地理学特講」の実施に向けた第2回予備調査の意味を持たせたものである。

今回は、昨年までの「地理学研究」や「地理学特講」と受講登録方法が大きく変わった。すなわち、予備登録を経て本登録に至る従来の方法が、教務システムを活用した通常科目と同様の方法に改められた。結果、今回の受講登録者は最終的に23名という規模に落ち着いたが、現地実習を共通実施する大学院の開講科目「人文地理学特論」の受講者は残念ながら居なかった。当科目が交通費や宿泊費などで相応の出費を要すること、事前学習や現地実習で学部生以上の負担を余儀なくされるので、こうした特質から敬遠されているのかもしれない。大学院生は中等教育教員を志す者が多いだけに、「世界史」必修世代に当てはまる現在の院生たちが地理の神髄であるフィールドワークを知らないで修了することは由々しき問題である（香川：2016c）。また、フィールドで観察し

た事柄から課題を発見して改善策を提案することは、大学入学前の高校生が総じて苦手とするところであり（香川・井上：2016)、こうした状況を打破するためにも教育学部や大学院教育学研究科でのフィールドトリップにおいて、「教える側」の能力を高めておくことが肝要である。

教務システムで受講者26名が確定した後、2名の受講辞退者が出て、受講者数は24名に減った。その内訳は、4回生1名（男子1名)、3回生15名（男子10名、女子5名)、2回生8名（男子3名、女子4名）である。それから更に後述する第2回事前学習会の直前に1名の受講辞退者（2回生女子）が出てしまい、最終的な受講生は23名となった。それゆえ、第1回事前学習会で分担を決めた、訪問地域に関する論文の要旨をまとめるための担当論文ユニット（一人あたり3～4論文）に穴が開き、それを筆者（香川）が埋めざるを得なくなった。安易な受講登録や無責任な受講辞退をいかに少なくしていくかが今後の課題である。しかし、現状ではシラバスでの表現を少し厳しくしておくことで対応するしか他に術はないだろう。

学生の他には、国際地理オリンピック日本委員会実行委員会で活躍している本学卒業生（大学院も修了）の神奈川県立川崎高等学校教諭・井上明日香さんが加わってくれた。ただ、第2回事前学習会直前の受講辞退に伴って一部の行程でキャンセル料が発生する恐れが出てきた。一部とはいえ、受講学生や辞退学生当人に金銭的な負担を強いるのも憚られたため、現地訪問を希望した附属高等学校1年の生徒（筆者の娘）を自費参加させ、キャンセル料の負担を排除した。

Ⅱ．事前学習会―実施方法とその内容―

今回の本授業科目は、現地実習が2泊3日で、第1日が3コマ（6時間、以下1コマあたり2時間)、第2日が5コマ、第3日は2コマからなる。そこで、現地実習の総時間数10コマに対する不足分5コマを事前学習会で補填することとし、第1回事前学習会を5月28日（土）に2コマ（4時間)、第2回事前学習会を7月2日（土）に2コマ（4時間)、第3回事前学習会を8月10日（水）に1コマ（2時間）実施した。これで合計15コマとなり、2単位科目の基礎要件を満たした。

1. 第1回事前学習会（5月28日（土））

事前学習会は、シラバスから少し変更して12時半から始めた。これは「昼食を摂ってから11時半開始」という例年の方法でも寝過ごして遅刻する者が散見されることを踏まえた改善策である。それでも寝過ごしを理由に無断欠席した者が3名も生じた（うち1名は第1回事前学習会後にキャンセル)。無断欠席者に対しては成績評価で相応の減点を施したが、午後からの会合でさえ出席できないようでは現地行動で足かせになってしまうことが懸念される。

この事前学習会では、現地実習での行程を示し、あらかじめ決めておいた文献ユニットを提示して、話し合いで各ユニットの担当者を決めた。各々の文献ユニットは3～4本の文献からなり、担当ページ数に可能な限り大きな差が生じないよう配慮するとともに、できるだけ3か所の訪問地（飛騨古川、高山、富山）を各自が担当できるよう周到に組み上げたものである。ただ、飛騨古川の文献数が受講生数に満たなかったため、ここを担当できない受講生も生じた。これらの文献は後述する所定の条件を設けCiNii検索でヒットしたものを更に吟味したものである。文献には本学の附属図書館に所蔵されていないもの、機関リポジトリやJ-Stageなどでオープンアクセスになっていないものも珍しくないため、附属図書館の協力を仰いで、他機関所蔵資料の相互利用手続きに関わるリーフレットを添えて文献収集に資するようにした。当初は面倒くささを感じる者も多いようだが、「鍛えられたことが卒論作成時には非常に役立った」という声を学生から卒業時に聞くと嬉しいものである。

また、例年の当授業科目は現地集合・現地解散を旨としているが、今回は旅費を少しでも節減するため、希望者のみ京都駅で集合・解散となるJR学生団体乗車券による選択肢を用意した。学生団体乗車券は普通運賃が半額になるため学生にとってはメリットが大きい。欠席者に対しても、当日の資料を改めて配布した際に希望を尋ねて集約したところ、往路（京都→飛騨古川）は全員、復路（富山→京都）は18名の学生が団体乗車券の利用を希望した。富山で離脱する5名の学生は、現地実習後に金沢など北陸地区で旅を続けるとのことであった。

2. 第2回事前学習会（7月2日（土））

この日の事前学習は、12時半開始で文献要旨の発表が中心となることをあらかじめ一括送信メールで再確認してから実施した。本学の附属図書館に所蔵されておらずオープンアクセスになっていない文献も多くあったため、文献収集、精読、要旨作成のための時間を確保する観点から、第1回事前学習会の後に1か月余りの間隔を開けた。文献の要旨は、筆者による微調整ののちに合冊配布することを前提としてテンプレート上でまとめさせた。このテンプレートは第1回事前学習会が終わってすぐに全ての受講生に宛てて送信した。要旨をまとめる際には、文献の読み込みの深さを判断できるようにキーワードを付けさせた。もっとも、当初から論文にキーワードが付いているものはその流用を認めた。ただし、「飛騨古川」、「高山市」、「飛騨高山」、「富山」、「コンパクトシティ」は要旨とともに提示するキーワードから除外させた。それは、文献をCiNiiで検索する際にこれらのキーワードを用いた（高山については「高山市」と「飛騨高山」を別個に検索し、富山では「富山」と「コンパクトシティ」をAND検索した）ためである。つまり、キーワードの重複を避ける狙いからの措置である。

リストアップされた文献は、飛騨古川が12本、高山が56本（のちに要旨を微調整する過程で筆者が知り得た直近の文献を追加したため９本が増えて65本になった）、富山が30本を数え、総数では107本に及んだ。別稿（香川：2017a，2017b）で詳述するように、比較的新しい文献に限定したにも関わらず多数の文献が得られたことは、今回の訪問地が広く注目を集めていることの証左であるといえよう。文献の担当本数は、受講生は一人あたり3～4本、筆者は受講辞退者担当分や追加分を全て担当したため22本分の要旨をまとめることとなった。

各受講生からは、2名の未提出者を除いて第2回事前学習会前日の締切に間に合わせてファイルが届いた。個々の受講生が担当する文献3～4本の要旨は、A4サイズ１枚の片面にまとまっているため、揃っていた要旨のシートを全て印刷して事前学習の際に配布し、これをもとに出席者それぞれが論文紹介をした。質疑応答やコメントのための時間確保も要することから、各自が担当した論文のうち１編だけを任意に選んで紹介してもらわざるを得なかったのが残念である。

3. 第3回事前学習会（8月10日（水））

この日は、1コマ（2時間）を12時半に始めた。内容は、第2回事前学習会を欠席した受講生１名による論文要旨の発表、筆者による現地行動の再確認と補足説明、現地実習の第1日目に往路の移動車中で集める宿題の説明、現地で取り組む課題の説明を続けて実施した。また、鉄道運賃や特急料金、宿泊料金、団体行動時における施設入場料などの旅行代金の集金を行った。

宿題は、第2回予備調査（2016年2月）で大学院生と共に試行した、高山の新旧地形図を使って取り組むセンター試験の模擬問題の作成である。これは小問1題の選択肢、解答および解説を作る演習であり、次回の高等学校学習指導要領で設置される必修科目の「地理総合」に備えたものである。学習指導要領の施行直後は、中等教育現場の社会科や地理歴史科において地理を専門とする教員の不足が必至であること、センター試験だけでなく近年は高等学校入試や教員採用試験でも地形図の読図が頻出していることなどを踏まえて、少しでも経験を積ませるという狙いがある。新旧地形図は高山市の中心市街地とその周辺をカバーする範囲とし、A4用紙を縦に使用して左側に古い地形図、右側に新しい地形図を並置した。新しい地形図は最新の1/25,000「高山」（2010年更新）、

古い地形図は1/50,000「高山」（1971年資料修正）を200％拡大して用いた。

また、現地で取り組む課題は、①飛騨古川が「高山観光に訪れる人々を飛騨古川に一層呼び込むための方策について200字以内で提案せよ。」、②高山が「高山の観光客誘致をめぐって、一層の改善が期待される点を１点指摘し、その改善策について提案せよ。全部を合わせて400字以内でまとめること。」というものである。富山での課題は取り組む時間が無く不可能なので、今回は見送らざるを得なかった。なお、課題作成のための原稿用紙は下書き用紙も含めて一人当たり5枚を現地で配布することを告知した。

Ⅲ．現地実習の実施

1. 現地実習1日目（高山市の天候：曇りのち雨、日中の最高気温：31.9℃（10:40））

京都駅烏丸口の鉄道案内所前で8:15に集合し、「ひだ25号」で定刻8:29に京都駅を発った。この列車は高山行きであるため、岐阜駅で併結される飛騨古川行きの「ひだ5号」に乗り換えた。車中では第3回事前学習会で課していた宿題を回収した。また、事前に受講生全員に宛てたＥメールでパン類などの昼食の準備を知らせておき、車内で昼食を済ませてから12:33に飛騨古川駅に降り立った。飛騨古川駅では、自宅のある神奈川県から先乗りしていた卒業生の井上明日香さんが出迎えてくれた。

飛騨古川駅には全員分の荷物を収容できる数のコインロッカーが無いため、第2回予備調査の折に交渉しておいたとおり、観光案内所で不要なカバン類を1個300円で預かってもらった。ここで市街地の散策マップも得て、一同で市街地を歩き始めた。ルートは散策マップに記された主要施設が点在する中心市街地一帯であり、鯉が泳ぐ瀬戸川に沿って土蔵が連なる線状の地区を主とした領域である。説明は市街地の各所で逐次おこなった。その主な内容は、①電線埋設（無柱化）による景観保全、②「飛騨の匠」による軒下の「雲」の伝統と特徴、③町家の建築様式（平入り住居）である。とりわけ①と③は京都でも各所で観察できる事象であるため、それを強調して帰洛後の自学自習の契機とした。

飛騨古川には建物内部を見学できる著名スポットが2か所ある。「飛騨の匠文化館」と「まつり会館」である。このうち後者については、翌日に高山で同様の施設見学を予定しているため経費節減の観点から割愛し、前者の見学に30分程度を割いた。この施設では飛騨地方の工芸を支える伝統技術が学べるため、飛騨古川だけでなく高山での市街地めぐりにも資するところが大きい。さらに、この施設見学には室内で涼をとって体力回復を図るという従来の経験に立脚したねらいもあった。

飛騨古川から高山までのJRでの移動でも学生団体割引を活用した。両駅間は約20分の行程であり、14:59に飛騨古川を発って高山に15:20に到着した。当初は駅から宿泊先のホテル（市内の鍛冶橋西詰付近）まで歩いて移動する予定であったが、駅頭に降り立った時に激しい降雨に見舞われたためタクシーに分乗して宿泊先まで移動した。今回の宿舎は、ミーティングができないビジネスホテルで、一同で食事ができる場所の確保もできなかったため、当日の夕食を各自で摂ること、翌朝の朝食時間（館内）や集合時間などをロビーで知らせてから解散した。前章末の課題①を与えていたことや小雨が残っていたため、投宿後に市街地散策に出掛けた受講生は多くなかったようである。まだ明るい時間帯であったので、もう少し地域観察の貪欲さが欲しいところである。

2. 現地実習2日目（高山市の天候：晴、日中の最高気温:31.1℃（13:20））

この日は多くの観光客で混雑しないうちに高山陣屋（以下では陣屋と記す）に入場するため、その開館時間である8:45に合わせ宿舎のロビーで8:25に待ち合わせた。わずかに遅刻した者が２名いたが8:30に宿舎を出て鍛冶橋の西詰で高山市の都市計画を簡単に説明してから橋を渡り、上三之町を見学しつつ高山陣屋に至った。宿舎から陣屋までは宮川左岸経由が距離は近いが、陣屋から次の見学ポイントである「高山祭屋台会館」に向かう際に

時間を違えて高山の代表的観光スポットを観察するため、人通りが少ない朝の様子を観察しつつ移動した。

当地区は産業学習の一環として5・6年向け社会科副読本でも扱われているが、農林業や製造業と比べるとサービス業は扱いにくいためか、高山市立図書館「煥章館」に収蔵されている近年の副読本（高山市教育委員会：2004，2006，2009，2014）を精査しても、観光業の扱いは3〜4頁に留まっているのが実情である。

陣屋とりわけ米蔵（写真1）には、当地の歴史を語る史資料が豊富に展示されており、各自の好みも異なっていると考えられるため、入場後すぐに陣屋の簡単な説明をしてから一時解散した。見学のために設けた時間は約1時間半である。各自が陣屋内を一通り見学したのち、陣屋朝市の一画で再集合して上三之町や下二之町を経由して高山祭屋台会館に向かった。既に10時半を過ぎた上三之町には多くの観光客が居た（写真2）が、他の地区に観光客が少ないという地域差は、後述するレポートでも問題点として数人から指摘があった。

「高山祭屋台会館」は、高山祭（櫻山八幡宮例祭、秋の八幡祭）の屋台を展示する施設で、通常は市街地内各町の屋台蔵に収納されている屋台を年に数回入れ替えて展示される施設である。間近に屋台の意匠を観察できるうえ、10分程度に編集された八幡祭のビデオ上映も行われているため、春祭（山王祭）や秋祭（八幡祭）ではない日時に高山を訪問した場合は必見の施設であると思われる。ただ、高山観光のハイライトとなっている上三之町から500m程度離れているだけで観光客は極端に少ない。別稿（香川：2017a，2017b）で取り上げたいくつかの文献が語るように、観光客の滞在時間が短いこと、市内の観光スポットを飽きずに巡るためのルートが確立できていないことなど、観光客がストレスなくいつの間にか市街地を巡ってしまうような環境整備が立ち遅れているのかもしれない。

前日の飛騨古川における「飛騨の匠文化館」と同様に、我われ一行は「高山祭屋台会館」における暑さしのぎで体力を回復できた。その後、館外の日陰で午後からの簡単な説明、すなわち①課題を仕上げるための自由行動、②宿舎ロビーでの再集合時間、③夕刻以降のミーティングの予定などを告げて一時解散した。

夕刻以降は、宿舎の形態から恒例の打ち上げコンパを兼ねたミーティングができないため、事前に予約していた高山市図書館「煥章館」の生涯学習ホールを使って１時間半程度のミーティングを設定した。公共の施設であるため一人当たり200円程度で借用できたのは幸いであった。会場使用時間が18:00からであったことから、宿舎ロビーには17:35に集合して徒歩で会場へ向かった。高山は京都よりも秋の訪れが早く、夕涼みをしながら煥章館まで歩くことができた。

ミーティングでは、卒業生の井上明日香さんに進行の補助をお願いし、受講生には当日の午後に巡った場所とそこで感じたことを順に発言してもらった。発表順は宿舎の部屋番号の昇順として質疑応答の時間も設けたが、

写真１　高山陣屋の米蔵
（撮影：香川貴志 2016年8月23日）
この内部は様々な歴史的史資料の展示スペースに活用されており、屋根が飛騨地方の材木から作った板瓦で葺かれている特徴がある。

写真２　観光客で賑わう上三之町
（撮影：香川貴志 2016年8月23日）
日中は多くの人出があるものの、朝や夕刻以降は営業している店舗がほとんど無いため人出は決して多くない。

日中の疲れが残っていたのかフロアからの質問は低調であった。その代りに筆者から各発表に対してコメントをした。これらを含めて前章末の課題②を完成させるための素材を共有した。上三之町や宿舎の隣接地域しか巡っていない者が散見されたのは、フィールドワークに向かない学生が現地実習に登録しているという授業運営の難しさを示唆している。ミーティングは19:30頃に終えて、煥章館で翌朝の集合時間を告げたのち第2日の活動を閉じた。

3. 実習３日目（富山市の天候：晴、日中の最高気温:30.4℃（13:40））

レポート作成の時間を確保するため、宿舎ロビーでの集合はチェックアウト時間直前の9:50とした。ここから徒歩で高山駅まで移動し、駅売店や駅周辺のコンビニエンスストアで昼食を各自が調達し、「ひだ３号」で高山駅を11:00に発った。富山での行動時間に制約があるため、車内で移動中に昼食を済ませるという算段である。現地でのレポート課題①・②は「ひだ3号」の車中で回収した。一行は富山駅へ12:26に滑り込んだ。富山駅は北陸新幹線の開通後、在来線では高山本線が唯一ＪＲとして残っており、「あいの風とやま鉄道」が第三セクター鉄道として旧JR北陸本線を継承している。

改札口を出てから不要な荷物をコインロッカーに格納し、富山駅の新幹線改札口の正面に乗り入れた富山地方鉄道市内線の電停に至った。ここで市内線が富山ライトレールとの相互直通運転を計画していること、全ての受講生が論文で学んだコンパクトシティ政策の簡単な説明をした。その後、市内線（環状線）で総曲輪商店街に近いグランドプラザ前電停まで移動し、アトリウムに覆われた広場でLRTや中心商店街の説明をした。そして、富山からの帰路の列車に間に合うよう設定した再集合時間を告げて一時解散した。あいにく当日は総曲輪商店街の定休日で人通りが多くなかったのは残念であったが、無休で営業する郊外ショッピングセンターとの対比を実感するには格好の見聞ができた。

再び市内線（環状線）で富山駅に戻り、ここで離脱する学生5名、富山空港から羽田空港に向かう井上明日香さんと別れた。残る総勢20名のメンバーは、北陸新幹線のシャトル列車である「つるぎ719号」で15:15に富山を発ち、金沢で「サンダーバード34号」に乗り継いで帰洛した。京都駅到着は18:09の定刻であった。金沢駅での乗換が必須となった富山・高岡と京都・大阪方面との移動は、乗換による時間ロスや手間もあるためか、「サンダーバード」で直行往来のできた従前の方が便利だったように感じた。

Ⅳ．事後教育レポートの内容と考察

今回の授業では、シラバスに記載したアウトラインに従って成績評価を行った。評価項目を一層詳しく記すと、(1)第1回～第3回の事前学習会への出席と取組、(2)第2回事前学習会で提出させた担当論文の要旨、(3)第3回事前学習会で与えた宿題（往路の車中で回収）、(4)現地実習中の受講態度、(5)第3回事前学習会で与えた現地での課題（本稿Ⅱ章の末尾に記した①と②、高山から富山への車中で回収）、(6)8月23日のミーティングでの報告内容、以上の6項目である。以下では、上記の(3)で得られた内容の特徴を記すと同時に、受講生の読図能力の弱点と改善方法を模索する。さらに飛騨古川や高山におけるレポート（上記の(5)）の分析を通じて、両地域で一層の観光振興を図るための方策を探る。

1. 新旧地形図を用いたセンター試験模擬設問の作成課題からみた受講生の読図能力とその改善点

この模擬設問の作成は宿題として第3回事前学習会の際に「往路の車中で回収します」と告げて課したものである。高等学校で地理Aや地理Bを履修していない、あるいはセンター試験で地理Aや地理Bを受験していないという受講生が多いことを予測して、センター試験の過去問から新旧地形図を使って解答する類題（2015年度セン

ター試験追試「地理B」第6問の問3＝紙幅の都合で割愛）を例示し、さらにⅡ章3節で触れた高山の新旧地形図を使った例題を示した。

宿題は総じて良くできていたが、集約すると2つの難点も明らかになった。それは(ア)地図記号の把握が甘い、(イ)地形図から読み取れないことを誤って読み取ろうとしている、という問題点である。(ア)をより具体的に記せば、官公署と果樹園の記号の混同、高等学校の記号が理解できていない、新しい地図記号（図書館、博物館、老人ホームなど）が旧図には無く新図のみで確認できるため、これらを新設されたものと誤認してしまうなど、読図の基礎に関わる判断ミスである。幸いにもこうしたケースは少なかったが、２晩目のミーティングの際に注意点として説明しておいた。

また（イ）については、斜線で総描される密集市街地の拡大や独立家屋の図上での増加をもって「人口が増加した」と短絡的に判断してしまう誤りが散見された。家屋は増えていても1世帯当たりの人員が減少していれば、当該地域の人口が減少傾向にあってもおかしくないことを知っておく必要がある。これについても２晩目のミーティングの際に読図技法の一つとして説明した。近年はこうした設問が教員採用試験でも頻出しているので、読図演習を講義で積極的に取り上げていくなどの授業改善が必須であろう。

2. 現地での課題①レポートからみた飛騨古川の観光振興に向けた方策

既にⅡ章の章末に記したが、課題①は「高山観光に訪れる人々を飛騨古川に一層呼び込むための方策について200字以内で提案せよ。」というものである。極めて限られた字数ながら複数の提案をした者が数名いたため、回答内容の総数は28を数え、受講生数を上回っている。このうち、施設整備などのハード系が5件、接客の工夫などのソフト系が21件、交通サービスの充実などの折衷系が2件あった。

一番目にハード系についてみると、(1)駅の充実（コインロッカーやコンビニの整備）、(2)電柱の無柱化の一層の促進、(3)シンボル（ランドマーク）創成、(4)休憩所の増設、(5)日本を堪能できる高級旅館の整備、これらが1件ずつ指摘された。(1)は現状では需要不足だろうし、(2)と(3)は町村合併で広域化した飛騨市の財政との相談が不可欠であるうえ、「飛騨の匠文化館」と「まつり会館」がある現状では更なる増設は困難だと思われる。(4)は店舗が少ないので休憩できる場所が限られることに根差していると考えられる。(5)は高級に分類できるような老舗旅館が市街地にあるので、それを知らないことから出た意見ではないかと推察される。いずれにせよ、ハード系の整備には行財政との絡みの中でガバナンス的な視点が求められる。２日目の夕刻に開催したミーティングでも、高山の事例ともあわせて、こうした視点の大切さを解説しておいた。今後は、本稿の別刷が仕上がった後に受講生へ配布するなどして学習の深化を図りたい。レポートに関わる以下の項目でもそれは同様である。

二番目にソフト系については、(1)広報や案内板の工夫（高山で「もうひとつの飛騨」などのキャンペーンを行う、外国語表記を添えた案内板を整備するなど）が8件、(2)市街地めぐりの案内人制度の創設が4件、(3)食や買物の充実が4件、(4)ウォークラリーやスタンプラリーなどでの高山との協働が3件、(5)高山を起点としたバスツアーの開設が1件、(6)女性客の一層の開拓が1件あった。(1)、(4)、(5)は高山とのリンクを強く意識したもので、いわゆるルート観光の拡充と解釈することができる。両都市は近いようで意外と離れている（鉄道距離で約15km）ため、その距離感の克服が課題解決の鍵となろう。(2)は昨年訪問した豊後高田で充実している制度である（香川：2016a）。観光客への接遇だけでなく、地元の人々の生き甲斐にも多大な貢献ができるので、実現に向けて努力する価値は十分にあると思われる。(3)と(6)はクチコミによる宣伝効果が期待できる提案で、何か飛騨古川にしかない「優れモノ」を如何に開拓し広報していくかが工夫の勘どころであろう。ソフト系の充実には、いずれの場合も起爆剤となれる人材が不可欠なのは言うまでもない。

三番目に折衷系では、(1)飛騨古川を巡るミニバスの創設が1件、(2)高山～飛騨古川の列車増発が1件あげられ

た。これらは、(1)が市内交通、(2)が都市間交通といえる。(1)は古川の見どころが比較的狭い市街地に偏在しているため、むしろソフト系の(4)ともリンクさせて、安全に楽しく歩けるウォーキングコース（英語圏ではしばしばurban trailと呼ばれる）などを整備する方が現実的であろう。(2)は高山と古川はともに自家用車が普及している地域であるため、私企業であるJR東海は積極的にはなれないだろう。乗客を観光客だけに期待するのではなく、高齢社会が一層進んでいく環境のもと、居住者の利便性向上を図ることも視野に入れなければならない。公共交通の整備には、駅周辺への公立病院や公共施設の誘致なども含めた包括的な地域政策が求められる。

3. 現地での課題②レポートを基盤とした高山の観光客誘致の改善に向けた方策

この課題もⅡ章の末尾に記したものを再掲することになるが「高山の観光客誘致をめぐって、一層の改善が期待される点を１点指摘し、その改善策について提案せよ。全部を合わせて400字以内でまとめること。」という問いを投げかけた。受講生の中には複数の改善点を併記した者もいたため、指摘された改善点の総数は受講生23名に対して26点ある。得られた改善点を内容が類似したものごとにまとめ、その数が多い順に列記すると、(1)観光スポット（9件）、(2)店舗（8件）、(3)交通（5件）、(4)接客などのソフト面（4件）、以上の４種となる。これらについて個別に内容をみていこう。

(1)観光スポットについては、重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）の他には見どころが少ないという趣旨の指摘が6件あり、そのすべてにおいて観光客が周辺に溢れ出すような集客施設の必要性を訴えていた。高山には屋台会館や「飛騨の里」などの施設はあるが、前者は良い施設でありながら伝建地区からの微妙な距離感から訪問客が限られている印象をぬぐい切れない。実際、我々が屋台会館を訪ねたときも入館者は多くなかった。財政的な難しさはあろうが、上町一帯には多くの観光客が集まるので、それと少し異なった店舗やサービスを下町一帯に整備して、徒歩での移動を厭わずにできるような「歩いて一層楽しい」街並み整備が望まれる。「飛騨の里」については、筆者が２日目午後の個別フィールドワークの時間を活用して訪問したが、そこでは受講生に全く出会わなかった。入場料を要することもあろうが、「行き方やバス時刻が分からず諦めた」という受講生が少なからずいたので、広報活動の改善が不可欠であろう。

(2)店舗に関しては、伝建地区で類似した店が多いため「最初は珍しく美しく感じても慣れるとすべてが同じに見える」という、長所が短所にもなることを指摘した回答が5件、店舗の閉店時刻が早過ぎるとの回答が3件寄せられた。統一が取れていながらも単調であることに伝建地区の難点を見出した前者は、街づくりの盲点への指摘になっており、ハードが整えられたのちにソフト面での工夫が不可欠であることを如実に示している。受講生による改善策では「自身がどこにいるのか分かるように店舗の個性化が必須」という提案が揃った。しかし、店舗の取扱商品に変化を持たせるのは、古さや郷愁を期待される伝建地区では困難であろう。そこで、昨年訪問した豊後高田の「一店一宝」のようなチャームポイントで個性を強調するのも一つの案となり得るし、工芸風の小さな干支置物を街角へ順に配置して景観保全を図りながら「歩くまち」に相応しランドマーク形成ができれば、これまでにない魅力を引き出すことができるかもしれない。他方、店舗の営業時間が短いことは、全ての受講生の提案ににみられた「営業時間を延長し顧客を増やす」という趣旨の回答では不十分であろう。買物目的だけで観光客は外に出てこないので、街並みにフィットするエンターテイメントや外食を楽しめる空間の整備が望まれる。

(3)交通については、伝建地区から他の場所への公共交通が不便であるという指摘が4件、広域交通の不十分さの指摘が1件得られた。高山市内のバス路線はほぼ全てが高山駅を拠点としている一方、伝建地区から高山駅は徒歩15分程度で移動できるので、これが地元では徒歩圏内とみなされている可能性がある。受講生が提案した改善策としてはバス交通の案内板の増設、市街地回遊バスの開設などが提案された。前者はスマートフォンの普及で急速に必要性が低下しているので難しいかもしれないが、後者については高山駅～伝建地区～屋台会館～飛騨

の里を30分程度の間隔で運行する回遊バスを試験運行できないものだろうか。また、一人のみから指摘があった広域交通については、バス交通だけでなくJRを活用して飛騨一ノ宮や飛騨古川とリンクする改善案が提示された。実際の広域交通を精査すると、高山駅を拠点として白川郷、奥飛騨・平湯温泉郷、乗鞍高原などへ路線バスが通じているので、むしろこれらのルートの広報が行き届いていないと考えるべきではなかろうか。

(4)接客などのソフト面に関しては、サービスが多言語対応に偏っているとの指摘が2件、11言語が揃った散策マップの配布場所が限られるとの指摘が1件、休憩所が少ないという指摘が1件寄せられた。このうち最初の2種は外国人観光客を視野に入れた難点の指摘であり、改善策として他のサービスの充実や店舗での散策マップ配布などが提案された。特に欧米先進国からの訪日客は総じて嵩張る土産類をあまり購入しないようにみえるし、アジア各地からの観光客も家電製品や医薬品の「爆買い」を除いては購買欲が高いようには見えない。しかし旅の途中での食事は欠かせないので、飲食店を基盤とした接客店舗の整備やサービス機能の向上には工夫を施す余地があろう。日本人観光客を対象にした「高山ラーメン」の店舗巡り企画、親子で楽しめるスタンプラリーなども、少額の投資で既存の店舗や施設を活用できる点でコストパフォーマンスが高いように思われる。

Ⅴ．成績評価を含めた全体総括―結びに代えて―

本学ではGPA制度の導入が遅れているが、近い将来に導入が必至であると考えて、筆者は演習（ゼミ）などの少人数科目を除いてGPAを意識した成績評価に努めている。今回の成績評価もその例に漏れない。評価の内訳は、秀（90点以上）3名、優（80点台）9名、良（70点台）9名、可（60点台）2名、不可（59点未満）該当者無しである。評価の素材は、前章の冒頭に記したとおりである。評価「秀」となった受講生は、総じて文献要旨のまとめに優れており、宿題やレポートが観察力と追究力に満ちていた者である。評価「優」を得た受講生は、いずれかの課題で甘さが見られたものの相応の観察力や追究力を感じさせてくれた者である。評価「良」の受講生は、文献要旨のまとめ方に稚拙さが残っていたり、追究力の弱さを感じさせるものの、課題で求めた最低限の問いには概ね反応できていた。最後に評価が「可」であった受講生は、提出物の多くに甘さが残り、現地フィールドにおいて集合時間に遅れる、フィールドノートを活用していないなどの怠惰さが目立った者である。

現地実習の日程が既に前期の成績報告期限を過ぎていたため、今年度も昨年度と同様に教務・入試課の教務担当に対して成績報告の締切期限延長を願い出る必要があった。教務上のカレンダーで前期の最終講義が8月上旬となり、その直後には免許更新講習会（10年期研修）がある。8月中旬の「盆休暇」は旅費や宿泊費が高騰し、学生の多くが帰省する。また、8月末からは教育実習の事前指導が始まる。こうした状況から本授業科目「地理学特講」や奇数年開講の「地理学研究」の実施を必然的に8月20日直後に設定せざるを得ない。成績報告の提出期限は延長してもらっても8月末がほぼ限界であり、大量のレポートを正確に読んで厳正な評価をするには大変にタイトなスケジュールで進まないといけない。

こうした多くの悪条件を克服するには、日帰りの野外実習を3~4回設定する、開講期を前期から後期にシフトさせるなどの選択肢も有り得る。ただ、前者では特定地域の生活リズムを体験できない難点があり、後者には宿泊を伴う行程を組める冬期休暇が短いという難しさがある。本授業科目の一層の改善に向けて、これらの障壁を除去する方法を模索し続け、さまざまなシミュレーションを重ねていくことが求められる。

謝辞

本授業科目の実施、および本稿の作成にあたって、高山市教育委員会学校教育課指導主事の梶田哲也様，高山市都市整備課の小瀬昌亮様，高山市文化財課の押井正行様，高山市立図書館「煥章館」の皆様には、ひとかたならぬご支援とご配慮を賜りました。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

参考文献

＊事前学習会で扱った対象地域に関わる107編の文献については、下記の香川（2017a，2017b）を参照のこと。

香川貴志（2016a）「レトロを基軸にした地域振興へのアプローチ―2015（平成27）年度『地理学研究』の覚え書き―」，京都教育大学教育実践研究紀要，16，pp.1-10.

香川貴志（2016b）「懐かしさを感じさせる街を歩くための事前学習の記録―門司港レトロ、豊後高田「昭和の町」、別府温泉郷を事例地域として―」，京都教育大学環境教育研究年報，24，pp.1-14.

香川貴志（2016c）「中学校社会科地理的分野における苦手意識の偏在状況と改善に向けた提案」，関西大学教職支援センター年報2015，pp.7-11.

香川貴志（2017a）「飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習会の記録（第1報）―飛騨古川地区と富山市街地について―」，京都教育大学環境教育研究年報，25，pp.31-44.

香川貴志（2017b）「飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習会の記録（第2報）―高山市について―」，京都教育大学環境教育研究年報，25，pp.45-62.

香川貴志・井上明日香（2016）「国際地理オリンピック2015国内3次試験の設計と実践」，E-journal GEO，10-2，pp.136-144.

高山市教育委員会（2004）『飛騨の高山 5・6年』第10版，pp.4-7.

高山市教育委員会（2006）『飛騨の高山 5・6年』第11版，pp.5-7.

高山市教育委員会（2009）『飛騨の高山 5・6年』第12版，pp.5-7.

高山市教育委員会（2014）『飛騨の高山 5・6年』第17版，pp.5-7.